

存続「非常に難しい」

2011年10月04日



十和田市駅を出発する十和田観光電鉄の車両＝十和田市内

十和田観光電鉄(十和田市―三沢、14・7キロ)が沿線自治体に財政支援を求めていた問題で、3日、沿線3市町は同社に支援拒否の回答を示した。これにより、同社の鉄路は廃線が濃厚になった。

この日、十和田市、三沢市、六戸町の3首長らは十和田市役所で同社の白石鉄右工門社長に対し「財政支援をしても、今後の経営改善が見込めない」として、要請通りの支援を拒否する意向を伝えた。

同社は、2002年度以降、沿線3市町から計約1億7千万円の財政支援を受けている。一方で、少子化や、東北新幹線七戸十和田駅の開業により利用客減に歯止めがかからず、鉄道の赤字を補填(ほ・てん)していたホテルやバス事業の収入も、東日本大震災の影響で減少したという。

このため同社は、鉄道事業継続には更なる支援が必要として、今後10年間で、従来の枠組みによる支援1億400万円に、自社負担分の設備投資費や修繕費など4億1700万円を加えた5億2100万円の支援を要請。3市町は、従来の枠組みを超えた4億1700万円分の財政支援について拒否した。

会談終了後に会見した小山田久・十和田市長は(1)これ以上支援をしても経営改善が望めない(2)一企業に対し公金を使うことについて住民の理解が得られない(3)廃線になっても、同電鉄の代替バスにより住民の足が確保できる、と説明した。

白石社長は「お願いしていた支援が得られなければ、(鉄路の存続は)非常に難しい」と話し、廃線を示唆した。同社は、今月上旬の取締役会で今後の方針を決定し、同月中旬には沿線自治体などで作る「十和田観光鉄道活性化協議会」で正式に公表するという。

同社の十和田市駅は、立て替えのため所有者から来年3月までの退去を求められている。白石社長は「交通手段について空白を作らないよう最大限努力する」と話し、廃線にする場合でも代替バスなどで利用客の足は確保するとしている。(鈴木友里子)

◆十和田観光電鉄◆

十和田市から六戸町を経て三沢市を結ぶ14・7キロに11駅がある。1日17往復(土日祝日は12往復)。1922年9月に開業、来年9月には90周年を迎える。利用者の約8割が沿線の学校に通う中高生だという。ホテルやバス事業も手掛けており、同社の収益に占める鉄道事業の割合は約5%。